児童、海の課題考える

アクア・トトや三重の干潟見学

飯田哲夫さん（左端）からサツキマスの説明を受ける子どもたち＝各務原市川島笠田町、世界淡水魚園水族館アクア・トトぎふ

県内の小学生が海で生じている課題やその解決を考える体験学習ツアーが8日、1泊2日の日程で始まった。初日は世界淡水魚園水族館アクア・トトぎふ（各務原市）などを訪れ、県内の河川の特徴やサツキマスの生態を学んだ。

日本財団の「海と日本プロジェクト」の一環で、一般社団法人海と日本プロジェクト岐阜が毎年開いている。今回は小学5、6年生20人が参加した。

同館では、子どもたちは飼育されているサツキマスを観察。スタッフの大島啓さんが県内には110種の淡水魚が生息し、うち外来種は37種を占め、絶滅危惧種は31種に上ると説明。「河川が単調化している。（池のようになった）ワンドが減って産卵するための二枚貝が少なくなったことや外来種の影響で（国天然記念物の）イタセンパラが減少した」と述べた。長良川漁業協同組合の組合員飯田哲夫さんはサツキマスの生態などを紹介。「川や海を守るためにごみを捨てないことが大事」と呼びかけた。

その後、三重県川越町の高松海岸で干潟を観察。愛知県南知多町の愛知県水産試験場漁業生産研究所でサツキマスの餌となるイカナゴが減少していることを地元の漁師から聞いた。

9日は南知多町の山海海岸を訪問。岐阜市の岐阜放送で、海の課題を解決するための行動を訴えるテレビCMを考える。（松田尚康）

無断複製・転載を禁じます